

令和7年度校内研究のまとめ

令和8年2月 研究推進委員会

1 研究主題

自分の考えをもち、根拠を明らかにして表現する生徒の育成（1年次）
～ICT等の活用による学習の個別最適化と協働的な学びを通して～

2 研究の方向性

- (1) 探究的・協働的な学びを通じた相手にわかりやすく伝える力の育成
- (2) 昨年度の研究成果であるICTの活用力を生かした授業づくり
- (3) 互いの授業実践を交流し、成果を共有できる校内研究

3 実践報告

今年度は上記の研究の方向性を共有し、1人1授業の提案を通して生徒に根拠を明らかにして表現する力をつけようと研究を進めてきた。生徒、教職員のアンケート結果は以下のとおりである。

(1) 山形二中 生活・学習状況調査（全校生）より

		当てはまる	まあまあ当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
① 授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる。	1 学期	34.2	52.3	12.3	1.2
	2 学期	41.3	47.5	10.0	1.2
② 授業では、各教科で学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行っている。	1 学期	35.1	47.7	13.5	3.7
	2 学期	41.1	42.0	15.0	1.9
③ 授業で、自分の考えを発表する機会では自分の考えがうまく伝わるように、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している。	1 学期	28.0	38.1	25.8	6.6
	2 学期	31.5	39.6	17.7	8.8
④ ICTを活用することで自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができる。	1 学期	43.2	44.0	9.3	3.4
	2 学期	54.4	38.2	6.4	1.0
⑤ ICTを活用することで、友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる。	1 学期	47.7	41.0	8.8	2.5
	2 学期	55.8	35.3	6.4	2.4
⑥ ICTを活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができる。	1 学期	49.4	36.6	11.3	2.7
	2 学期	54.4	37.9	6.4	1.2

この結果から、学期を追うごとに生徒の課題に向き合う姿勢が高まり、教科横断的な思考や学びのつながりを意識した活動が定着しつつあると言える。また、ICT活用の効果を実感している割合が大幅に向上し、ICTを介したコミュニケーションが学習の活性化につながっている。「ICTが便利だから使う」段階から「学びを深めるための道具」として認識され始めていると考えられる。

課題としては、③の発表の工夫に関する項目の回答に2極化が見られるように、発表が得意な生徒は増えているが、苦手な生徒はより苦手意識を強めている可能性がある点が挙げられる。発表が苦手な生徒への支援や小さな成功体験を積ませる機会づくりなどの工夫が必要である。

(2) 山形二中 授業改善チェックシート（教職員）より

		当てはまる	まあまあ当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
① 生徒が授業の中で、教科の特性に応じた見方・考え方を働かせるような手立てを講じている。	1 学期	28.6	67.9	3.6	0.0
	2 学期	40.7	55.6	3.7	0.0
② 知識・技能を身につける場面、思考・判断・表現を生かす場面を考慮し、主体的・対話的で深い学びに向けた単元づくりを心がけている。	1 学期	17.9	78.6	3.6	0.0
	2 学期	29.6	66.7	3.7	0.0

③ 生徒自らが既習事項を想起し、見通しをもつことができるように課題を設定している。	1 学期	14.3	78.6	7.1	0.0
	2 学期	33.3	51.9	14.8	0.0
④ 生徒自らが気づいたことや生徒の多様な問いを生かして課題意識をもつようにしている。	1 学期	17.9	64.3	14.3	3.6
	2 学期	11.1	81.5	7.4	0.0
⑤ 生徒が目的をもって情報を集めたり、考えを関連付けたり、吟味・検討したりできるような手立てを講じている。	1 学期	17.9	67.9	10.7	3.6
	2 学期	22.2	66.7	11.1	0.0
⑥ 生徒が自己選択や自己決定をする場を設けている。	1 学期	39.3	53.6	7.1	0.0
	2 学期	44.4	48.1	7.4	0.0
⑦ 生徒が課題に即しながら自分の考えを表現できるようにしている。	1 学期	10.7	89.3	0.0	0.0
	2 学期	29.6	63.0	7.4	0.0

何を知っていて何を考えるべきかを見通す③、研究テーマの中核である表現に関する⑦の項目で「当てはまる」の回答が増えていること、また、自分の考えを深める思考の出発点となる④では否定的解答が17.9%から7.4%に大きく減少していることがわかる。①②の項目の伸びもあわせると、授業デザインの質が向上し、安定した実践が増えていると言える。一方で③は否定的な回答の増加も見られ、「単元を見通した課題づくり」「既習事項とのつながりを意識した課題づくり」など、授業改善を進める中で難しさを感じる教員も増えていると思われる。

全体的に「まあまあ当てはまる」の割合が6～8割を占めており、高止まりの傾向にある。これは授業改善の方向性は共有されているが教員自身が「もっとよくできる」と前向きに感じていることの表れであり、実践の深まりが今後の課題であると言える。

(3) 今年度の実践から得られた成果（効果的な手立て）

4 来年度の校内研究に向けて

今年度の成果と課題を踏まえ「根拠を明らかにして表現する生徒の育成」に向けて、以下の点を大切にしながら実践を積み重ねていく。

視点① 主体的・協働的に学びたくなる探究課題の設定	視点② 思考・判断・表現する場面の設定
・生徒の疑問、興味・関心を生かした課題 ・生徒の生活体験に根差した課題 ・既習事項の応用が必要な課題 ・実社会の出来事を扱う課題 ・タイムリーな課題 ・比較を通して追究する課題 ・多様な考えができる課題 ・意見の分かれる課題	・モデル提示により評価基準を共有 ・既習事項を根拠として応用できるモデルの実践 ・モデル操作を通した思考の可視化 ・意図的な悩む・困る場面の設定 ・ツール・ミンモデルを用いたワークシート ・タブレットを用いた他者への説明

(1) 単元構造を見通した課題設定、単元づくり

- ・既習事項とのつながり、生徒の気づきや問いを生かす。

(2) 生徒の表現活動を支える手立ての充実

- ・表現のテンプレート（主張・根拠・理由付け）
- ・ICTを活用した表現方法の多様化

(3) 探究的な学びの支援スキルの向上

- ・思考ツールの活用などを通した情報の整理、比較、吟味の指導

また、授業改善に意欲的ではあるものの、不安を抱えている教員もいることから来年度は事前研を充実させ、授業者の学びが学校全体の学びになるようにしていく。個人の実践を可視化し、うまくいった実践もそうでない実践も安心して共有され、対話を通して深め合える研究にしていきたい。